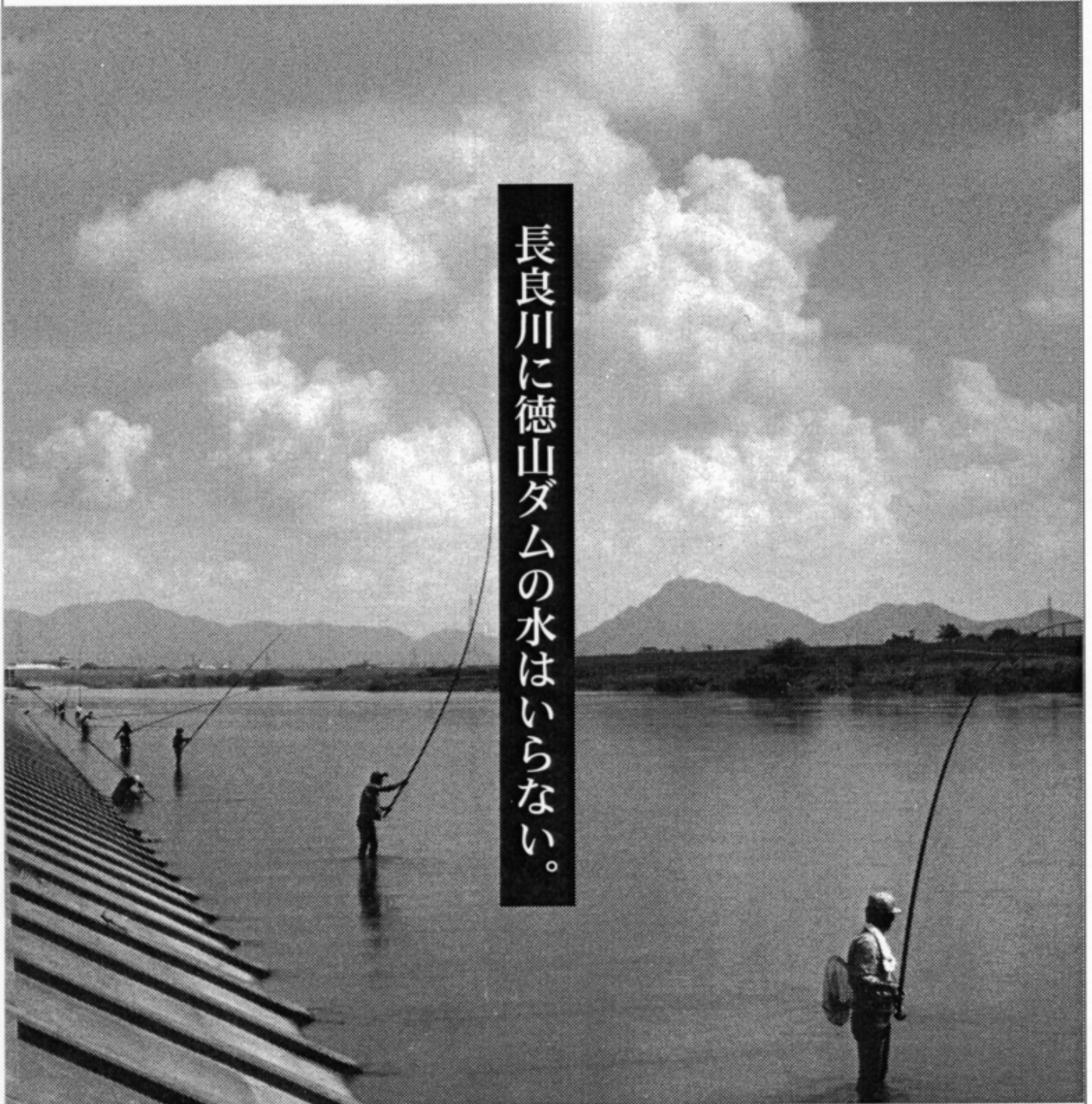
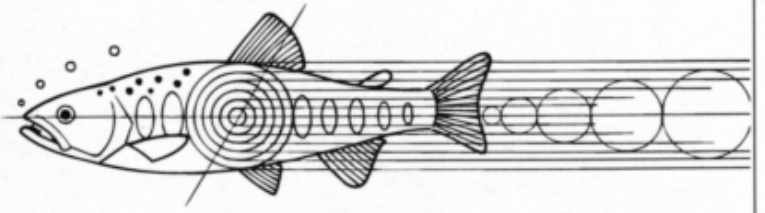


news

長良川市民学習会ニュース



長良川に徳山ダムの水はいらない。

No.4

2008年12月1日

表紙・目次P 1
署名ありがとうございましたP 2
古田知事への要請文P 5
市民学習会のこの一年P 6

長良川の魚たちは、いま？P 7
不透明すぎる！「上流分割案」合意P 11
校歌に歌われた長良川、事務局よりP 12

全国のみなさま、私たちが呼びかけました「長良川に徳山ダムの水はいらない」岐阜県議会請願署名に大きなご支援ありがとうございました。7月中旬から約2ヶ月間の署名運動でしたが、23,485筆の署名を9月24日に議会に提出することができました（期限に間に合わず事務局に届いた署名も多く、実質約2万5千の署名になりました）。

北は北海道、南は沖縄からも署名が郵送で送られてきました。岐阜市内長良川沿いの地域には署名用紙をリーフレットとセットにしてポスティングを行いました。小学生から高齢者まで幅広い層から「長良川を守れ！」と熱いメッセージを添えた署名が送られてきました。

御名前を列挙するのは省略させていただきますが、様々な労組、市民団体にもお世話になりました。ここでお礼申し上げます。

岐阜県議会への請願は、太田維久議員と大須賀しずか議員の紹介で行いました。与党の反対で請願は不採択となりましたが、本会議の最後に与党が「不採択賛成発言」を行うという異例の事態も生まれました

（県民が監視していることを強く意識したもので、署名の力が働いていると言って間違いありません）。また、古田知事は導水路建設を肯定しつつも「スケジュールありきではなく、まずは環境への影響を十分に調査検討することが重要。コストも点検する。」（中日）と議会答弁し、課題を残したまま着工をさせないことを改めて明言しました。



請願書を提出する粕谷市副代表（左）と県議会議員

08. 9/25 毎日新聞

徳山ダム「導水路」反対住民、県議会に提出
徳山ダム「導水路」反対住民ら集まった二万五千の署名を、県議会に提出する住民代表（左）と県議会議員（右）が握手を交わす。背景には「長良川を守れ！」と書かれた署名用紙が並ぶ。記者：山本 隆



請願書を提出する粕谷市副代表（左）と県議会議員

08. 9/25 岐阜新聞

徳山ダム導水路 同意撤回、知事に要請

市民団体、県議会に2万3000人署名
市民団体「長良川に徳山ダムの水はいらない」が、岐阜県議会に2万3000筆の署名を提出し、導水路建設の同意撤回を要請した。県議会は9月24日の本会議で、導水路建設に同意した。市民団体は、導水路建設が環境に悪影響を及ぼすとして、同意撤回を要請した。県知事は、導水路建設を肯定しつつも、環境への影響を十分に調査検討することが重要と答弁した。

08. 9/25 中日新聞

撤回請願 不採択に

徳山ダム「導水路」反対住民、県議会に提出
徳山ダム「導水路」反対住民ら集まった二万五千の署名を、県議会に提出する住民代表（左）と県議会議員（右）が握手を交わす。背景には「長良川を守れ！」と書かれた署名用紙が並ぶ。記者：山本 隆

撤回請願 不採択に
徳山ダム「導水路」反対住民ら集まった二万五千の署名を、県議会に提出する住民代表（左）と県議会議員（右）が握手を交わす。背景には「長良川を守れ！」と書かれた署名用紙が並ぶ。記者：山本 隆

08. 9/25 中日新聞

撤回請願 不採択に
徳山ダム「導水路」反対住民ら集まった二万五千の署名を、県議会に提出する住民代表（左）と県議会議員（右）が握手を交わす。背景には「長良川を守れ！」と書かれた署名用紙が並ぶ。記者：山本 隆

市民学習会は署名運動中も岐阜県や国交省に対する要請行動を進め、新たな状況も切り開いてきています。その成果はこの2万5千の署名が支えになっています。署名運動に区切りがついた現在、私たちは引き続き岐阜県の姿勢を迫及することを確認するとともに、この事業を積極的に推進する愛知県・名古屋市を迫及する愛知県の市民運動との連携が急務になっていると考えます。

08. 9/3 岐阜新聞

県に考えた

徳山ダム「導水路」反対住民、県議会に提出
徳山ダム「導水路」反対住民ら集まった二万五千の署名を、県議会に提出する住民代表（左）と県議会議員（右）が握手を交わす。背景には「長良川を守れ！」と書かれた署名用紙が並ぶ。記者：山本 隆

徳山ダム「導水路」反対住民、県議会に提出
徳山ダム「導水路」反対住民ら集まった二万五千の署名を、県議会に提出する住民代表（左）と県議会議員（右）が握手を交わす。背景には「長良川を守れ！」と書かれた署名用紙が並ぶ。記者：山本 隆

署名活動にさまざまに頑張った人たちの声です・・・・・・・・

全国の釣り仲間がネットで協力

私が所属する“NPO・自然を考える釣り人の会”を中心に、北は北海道、南は九州まで、全国の釣り仲間がネットを通じて、建設反対の署名協力をお願いしました。今回の導水路問題は、長良川河口堰・徳山ダムと併せて環境破壊の最たる問題であります。取り返しのつかない自然破壊をしながら、巨額な税金の無駄遣い。しかし、それが判っていながら「全国どこにでもある事」と諦める人の多い中、環境問題に対して非常に敏感な釣り人達が「他所事では無い！」と真剣に署名活動をして頂きました。

過去、振り返って見れば、環境破壊の殆どが官のエゴで進められた工事ばかり。

願わくば、今回の導水路建設を阻止することで、全国で行われている無駄な公共事業を見直すべきかけの一つになれば・・・と思います。(傍島邦彦)

長良川沿いをポスティング

長良川の水で育ち、今また金華山を仰ぎ、長良川の流れを見て生活しているのに、黙って見過ごすことはできません。老人の私ができる一番のお手伝いは何かと考え、運動を兼ねて、朝日の中、長良川沿いに一軒一軒ポスティングしました。多くの方がわざわざ80円切手を貼って集めた署名を送って下さいました。本当にありがたいことです。長良川近辺で生活される方々にとって長良川はなくてはならない場所だと痛感しました。コーヒーにクリープは無くてもいいですが、「鮎のいない長良川なんて」。「鮎のいない鵜飼」それを「世界遺産」に「清流国体」にと叫んでいる行政に対して、昔の美しく清き長良川に戻すために、一人一人の力を合わせていきましょう。(西部節子)

木曾川沿いの町で

私も署名活動に加わって、東奔西走。すると、「なんだか分りにくい。長良川に流されなければいいのか？木曾川に直接流す案ならオーケーなのか？」といろいろな人から聞かれるのです。ふうむ。これはゆゆしき問題提起。さっそく関係者に話を聞くことに。すると、「わかりにくいことは確か。導水路計画は国の事業。国を相手にまともに「計画反対」と声高にぶつけても馬の耳に念仏。だから、第一段階として「徳山ダムの水を長良川に流すのを止めて！そしてじっくりこの案を検討してみて、ということなんだ。」とのことでした。長良川河口堰、徳山ダム。作ってしまった巨大で無駄な施設。それらを無駄にしないために無駄を重ねる導水路計画。ということか？わかったようなわからないような、頭はまだ混乱していますが、「自然のままの川が癒しや喜びを与えてくれる」のは確か。これ以上ムダを重ねる愚行だけはストップさせたい！その一心で署名集めを続けることにします。(各務原市・M)

着工は許さない！ 導水路建設「是非」の市民議論はこれからだ！

NEWS 3号(08.8/17発行)でも報告しましたように、水資源機構(以下、「水機構」)への事業の承継など着工への手続きは着々と進められています(最近公開された資料で、この導水路事業を水機構に任せる理由に「導水路と河口堰活用の一体化」があることが明らかになりました)。一方で市民・国民に対する事業説明の場は6月29日の「ふれあいセミナー」以来、一切設定されていません。私たちが「国の回答が無いまま中断しているふれあいセミナーの再開」を要請していますが、国はあれこれ理由を付けて未だに開催しようとしません。2ヶ月たった8月28日、国はこっそりホームページで「セミナーで出た質問に対する回答」を掲示しましたが、その内容は、「岐阜県が早期着工を要請している」というような全く事

実と違うデマまがいの記述や「改めて「専門家意見を交換する場」を設ける必要はない」という横暴な態度表明まであり許せないものでした。私たちは対話の場を速やかに設けること、「導水路の水が長良川に流されることになった議論経過」の情報公開を繰り返し求めてきましたが、後者についてはこのほど一部が公開されました。その内容は、河口堰活用が目的であることを明らかにするものでした（P11をご覧ください）。

国の「河川環境への配慮」「県民への十分な説明」に身を任せ導水路事業に合意していく岐阜県の姿勢に県民は大きな不安を持っています。私たちは、古田知事に対し「長良川に徳山ダムの水を流す木曾川水系連絡導水路案の合意を撤回」する毅然たる姿勢を持つよう要請を文書（P5をご覧ください）でもって要請しました。

現在、岐阜県は導水路事業問題に関して部長級による「庁内連絡会議」を設け対応しています。その会議には専門家の意見を聴く仕組みがあります。私たちは市民学習会やシンポジウムで講演や助言をしていただいた8名の専門家を推薦し、県に対し疑問や意見を表明しています。今後これらに対する国・県の回答・対応が注目されます。県民、国民に開かれた導水路事業議論の出発点にもしたいものです。

みんなで注意深く監視しましょう。

密室で進められた導水路計画。事業の「是非」の市民議論はこれからです。

木曾川導水路の早期建設要請

県の求めで国交省HP修正

徳山ダムの水を長良川や木曾川に流す木曾川水系連絡導水路事業をめぐり、国土交通省中部地方整備局木曾川上流河川事務所がホームページ（HP）で「県から導水路の早期建設に関する要請を受けている」と記載していた。県は「そのような事実はない」と修正を求め、整備局は「県から導水路の新規事業採択に関

ったことがわかり、要請内容に合う形に修正した」としている。

同事業に反対する市民団体「長良川市民学習会」のメンバーが今月2日、県庁を訪れ、古田知事あての質問書を出し、県民の担当者に、HPの記載について「県民に早期建設を求める声はない。来年4月着工のスケジュールありきではないか」と指摘。県は「十分な調査と説明を求めている。誤解を招く表現なら訂正を求める」と回答した。（岡本洋太郎）

環境調査 119項目の意見

木曾川水系 導水路事業

県、国などに提出

県は、木曾川水系連絡導水路事業が環境に与える影響を調べている。調査項目は119項目にわたり、その調査方法について百十九項目にわたる意見を提出した。両者が地元県に意見を求めている。

導水路事業は徳山ダム（揖斐川町）の水を下流域で利用するため全長四十三キロの地下トンネルなどで木曾、長良両河川に流すが、放流先の川の環境悪化を懸念する声もある。

08. 11/28 中日新聞

08. 9/23 毎日新聞

説明責任を果たすため工しないよう求める市民団体のメンバーら



徳山ダム導水路計画で市民団体 調査し、説明責任を果たすため工しないよう求める市民団体のメンバーら

岐阜県知事 古田 肇 様

長良川に徳山ダムの水を流す木曾川水系連絡導水路案の合意を撤回してください

岐阜と言えば清流長良川、長良川と言えば鵜飼、というのが全国的なイメージになっております。しかし、私たちとほぼ同世代の古田知事ならお分かりのことと思いますが、残念ながら長良川は私たちが遊んだ、かつてのような豊かな清流ではありません。上流域での開発、道路工事、河口を塞ぐ河口堰、便利さを求める私たちの生活が、川やそこに棲む魚をはじめとする生き物の環境を悪化させてきました。長良川を代表する鮎やサツキマスの漁獲は激減し、かつてのような立派な天然鮎は少なくなりました。60種とも70種とも言われた魚種も減ってきていると聞きます。長良川河口域の、日本でも有数のシジミの産地はなくなりました。

その長良川に徳山ダムの水を流すという「木曾川水系連絡導水路計画の上下分割案」を知った私たちは大変驚き「これでは長良川は本当に死んでしまう！」と危機感を持ちました。私たちは長良川を長年調査・研究してきた専門家や研究者から話を聞き、計画の立案者である国土交通省に何度か説明を求め、ふれあいセミナーなどにも参加して意見を述べてきました。岐阜県、岐阜市の議員や県選出の国会議員にアンケート調査なども行いました。その結果、「環境改善」をうたっているこの計画はむしろ「環境悪化」になるのではという心配、危惧、恐れはますます深まっております。

ダムの水を鵜飼場の直上流で流すというのは、そこに目に見えないダムを建設することと同じです。遠く離れたダム湖で貯められ導水管で運ばれた水は長良川中流域の水温とかなり違うことは国土交通省の調査結果でも明らかです。ダム湖で貯められた水には様々な藻類が発生し水質の悪化が懸念されます。またダムからの導水は魚の生息にとって極めて重要な川底の状態を大きく変化させる恐れがあります。違う水系の水を入れることの生態系への影響も指摘されています。自然環境を大きく変える可能性のある計画には、自然に対する深い洞察力と謙虚さが求められ、慎重な上にも慎重な対応が求められています。

しかしこれら多くの疑問や指摘にたいしての国土交通省の回答は、あまりにも誠意のないもので、到底納得のいくものではありません。

長良川は流域の生活・文化・歴史・経済の根幹であり、かけがえのない宝です。長良川のように、市街地で1300年もの伝統と歴史を持つ鵜飼を行っている川はありません。この他に例のない貴重な財産を大切に生かし、生態系豊かな本物の清流を取り戻すことができれば、鵜飼を訪れる人々は本物に触れる感動を味わうことができるでしょう。緑豊かな金華山と長良川、長い歴史が育んできた町並みを保存再生し、新しい町作りに活かそうという動きが生まれ、多くの若者たちが参加しています。次代を担う若者たちも郷土を再認識し、誇りや愛着をいただくようになることと思います。

今回私たちの行った署名には、短い期間に、岐阜県民だけでなく、愛知県民や名古屋市民、さらに沖縄から北海道まで、全国から賛同の声が届いています。その中には岐阜県で生まれ育った人、岐阜県に住んだことがあるという人からの分も多数あります。この2万を超す「長良川を守って欲しい」という一人一人の想いを、ぜひお汲み取りください。

2010年には「第30回全国豊かな海づくり大会」が、海のない河川では初めて、岐阜県で開催されるとのこと。森・川・海が一体となった水環境の保全の重要性を、「水との共生」をキーワードに全国に向け発信されると伺っています。

環境重視を大きな政策課題としておられる古田知事には、ぜひとも、長良川に徳山ダムの水を流す木曾川水系連絡導水路案の合意を撤回してくださいませよう、心からお願いいたします。

2008年9月24日

「長良川に徳山ダムの水はいらない市民学習会」一同

長良川市民学習会の一年の経緯

長良川市民学習会代表・粕谷志郎

私自身、昨年暮れまで、徳山ダムの水が長良川へ流されようとする計画を全く知りませんでした。武藤現事務局長が、個人的に私に知らせて下さり、「市民学習会」がスタートしました。

当初は、なぜそんなことをするのか、いったいどういう影響が出るのか、など、分からないことばかりでした。名古屋女子大学の村上教授の話聞いて、ダムの水は冷たく、濁っていることを知りました。ダム下流の石に付く藻類も異なるそうです。やはり、ダムの水は「清流長良川」にはふさわしくない、と考えざるを得なくなりました。しかも、この水は鶴飼い場の少し上流から常時流されるというものです。

岐阜市にたずねても、誰も徳山ダムの水を流すような要請をしていないとのことでした。常時流される計画さえ知る者が少ないような状態でした。岐阜県にたずねると、「東濃地方の渇水対策」だと答えるのですが、水が行くのは東濃地方のはるか下流。まともな回答には見えません。

国土交通省は、長良川の渇水対策と答えましたが、平成6年の大渇水の時に、長良川でどんな被害が出たのかも答えられませんでした。漁師さんに聞くと、被害どころか「鮎がウファウファ捕れた」とか。結局は何の根拠もない「行政判断」ということでした。計画の中身も、あっちの説明とこっちの説明が異なっていたりです。最終的には「説明責任を果たす」とおっしゃるのですが、私たちの要求している説明会を、いまだ開いていません。

「説明責任を果たしていかないといけないのですが、今までと同じような回答では、ずれて繰り返しになるだけで、対応方法を検討している。」とのこと。30億円近くの負担をする岐阜県は、「工事の着工には同意していない。」「徳山ダムの水をどう使うか、意見を申し上げる。」などと煮え切らない態度で、計画だけがどんどん進んでいます。

一年間の学習活動を通して、冷たい、汚いダムの水を長良川に流す何ら合理的理由は見あたらないどころか、生態系を乱し、川に育まれた文化を破壊する行為であることが明らかになってきました。そして、総工費890億円は全く無駄な出費であることも。

<長良川市民学習会の主な活動 2007.12~2008.11>

07.12.17	第1回実行委員会	6.03	第3回市民学習会
08.1.14	第1回河川調査	6.04	岐阜市議会へ「請願」提出⇒6.23不採択
1.16	朝日新聞岐阜県版に意見広告掲載	6.27	市民学習会HP開設
1.16	第1回市民学習会	6.29	第2回ふれあいセミナーに参加
1.18	岐阜市役所交渉	7.28	岐阜県へ要請
2.19	岐阜県河川課交渉（1回目）	8.05	第2回河川調査（西平ダム・長良古津）
2.24	第1回導水路計画現地調査	9.02	岐阜県河川課交渉（2回目）
3.01	議員アンケート発送	9.22	中部地整交渉
3.23	第2回市民学習会	9.24	2万3489筆の請願署名を提出
4.22	木曾川上流河川事務所へ要請（1回目）	10.09	請願、岐阜県議会で不採択
4.29	第2回導水路計画現地調査	10.15	第4回市民学習会
5.11	木曾川上流河川事務所へ要請（2回目）	11.21	岐阜県へ緊急申入書提出⇒11.25 回答

長良川の魚たちは、いま？

古屋康則（岐阜大学教育学部）

1. はじめに

長良川の河口5km地点に堰が建造され、ゲートが閉鎖されてから13年が過ぎました。この間、長良川に生息する魚類にはどのような変化が見られたのでしょうか。この講演では、長良川におけるアユの漁獲量や魚類相をゲートの閉鎖以前と最近とで比較し、いま長良川の魚に起きていることを見つめ、今後の対策を考えたいと思います。

2. 長良川に生息する魚種

長良川の魚類相に関しては、過去にいくつもの調査がなされてきました。これらの調査結果と最近になって新たに別種として新種記載された種などの知見も合わせると、長良川での生息が記録されている魚として130種を挙げるすることができます。この種数は四国の四万十川や琵琶湖に比べてもひけをとらず、長良川は日本でも有数の魚種数の多い川であったと言えます。移入種18種を除く在来種112種のうち、汽水を主な生息場所とする魚（汽水魚）が60種、川と海とを行き来する魚（通し回遊魚）が11種と、半数以上が海との関わりを持っている魚たちです。ゲートが閉鎖された現在、これら海との関わりを持つ魚たちはどうなったのでしょうか？

3. 河口堰で影響を受ける魚

河川下流域は潮汐によって水位や塩分濃度が刻一刻と変化します。半月に1度の大潮の満潮時には塩水は川底を数キロ上流まで遡上します（図1A）。河口堰ができる以前の長良川では、塩水遡上が河口から35kmまで達していたといえますから、長良川では河口から35kmまでが「汽水域」であったと言えます。この広大な汽水域が消失し、現在では流れがほとんどない淡水のダム湖の状態となっています（図1C）。汽水域を生息の場としていた60種の汽水魚は、ゲートの閉鎖によって相当な影響を受けていることでしょう。また、産まれて間もない、遊泳力の乏しい仔魚が海へと流れ下るようなアユやカジカなどの通し回遊魚では、流れがほとんどないダム湖の区間を短時間で流下することは難しいと考えられます。さらに、河口堰のゲート自体が通し回遊魚の遡上に対して障害となることも十分に考えられます。

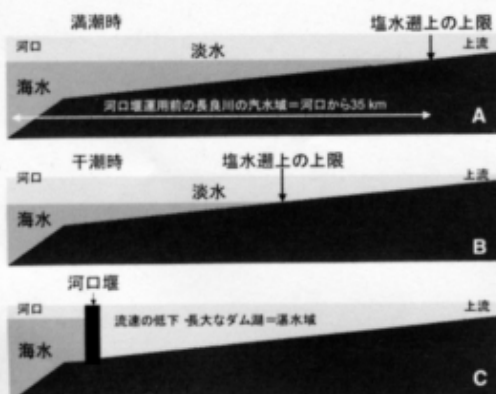


図1. 河川の下流域の淡水と海水の状態の模式図。通常は比重の重い海水が比重の軽い淡水の下に潜り込んでいる（塩水くさび）。満潮時には塩水くさびが最も上流まで到達し（A）、干潮時には最も下流まで下がる（B）。河口堰運用前の長良川では、大潮の満潮時には河口から35kmまで塩水の遡上がみられた（A）。現在は河口から5.5km地点に河口堰（ダム）が設けられており、海水の浸入がシャットアウトされることで堰より上流は完全に淡水の湖と化した（C）。

4. アユは減少したのか？

ゲート閉鎖以前から最近にかけて、長良川漁協、長良川中央漁協、および郡上漁協におけるアユの漁獲量は減少の一途をたどっています。漁獲量が減った理由として、アユの放流量と漁獲量との関係を調べた結果、ゲート閉鎖後に漁獲されているアユの大半は放流由来の魚であり、海から遡上した天然魚はほとんどいないことが示唆されました（図2）。

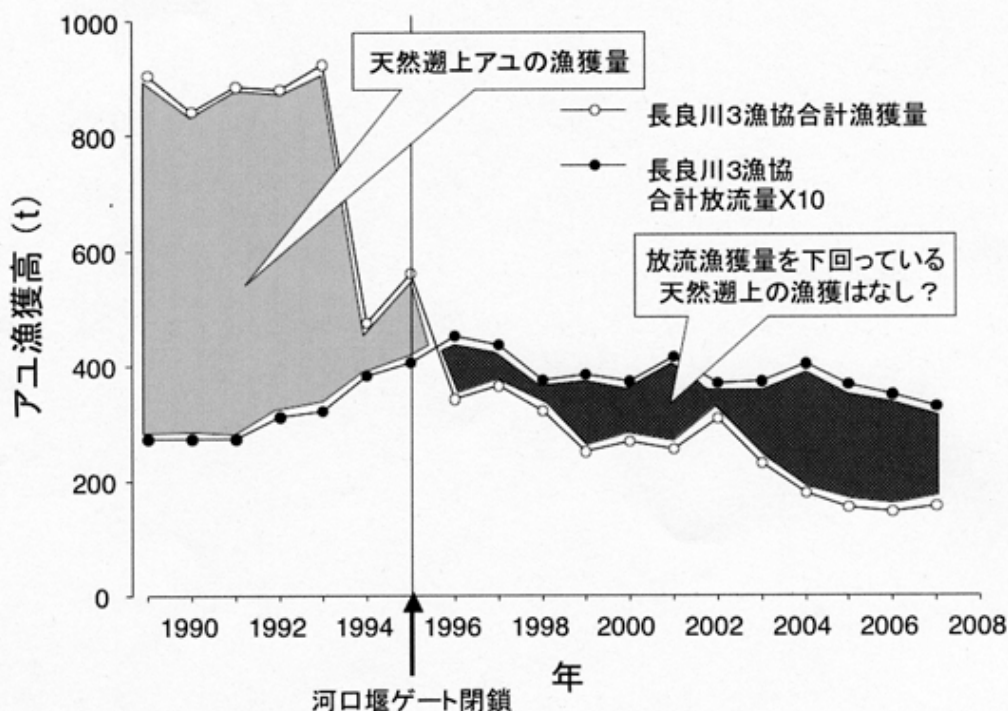


図2. 長良川3漁協（長良川下流漁協，長良川中央漁協，郡上漁協）におけるアユの漁獲高（○）および3漁協におけるアユの放流量の10倍量（●）の経年変化。通常，放流量の10倍量が放流漁獲量として漁獲高に寄与すると考えられている。従って，全漁獲量と放流漁獲量の差が天然遡上アユの漁獲量と考えられる。河口堰の運用が始まる1995年までは天然遡上アユの漁獲が見られたが，運用以降には全漁獲高が放流漁獲高を下回る状態が続いている。これは天然遡上アユが消失したことを示唆している。

そこで、「堰による流速低下が仔魚の流下を妨げている」という仮説の検証を試みました。アユのふ化仔魚は掛斐川では産卵場から汽水域までの流下に4日ほどしかかからないのに対し、長良川では産卵場から河口10km地点（まだ淡水域）までの流下に平均12日も要していることが示されました。仔魚は自身が持つ栄養で1週間程度は生きられますが、栄養が尽きる以前に餌を食べなければ餓死します。仔魚の餌となるプランクトンは汽水域では豊富ですが、長良川の淡水域では極めて少ないことから、長良川を流下している仔魚の大半は、汽水域に到達する以前に餓死している可能性が考えられます。現に、河口から18km地点から6km地点（堰直上部）まで流下する間に仔魚の密度は5分の1に減少していました。毎年、産卵の度にこのようなことを繰り返すと、天然遡上魚が年々減って行くことは容易に予想できます。流下仔魚数を1999年と2005年と比較すると（図3）、掛斐川ではほとんど変わっていないのに対して、長良川河口堰上流部では10分の1以下にまで減少していました。

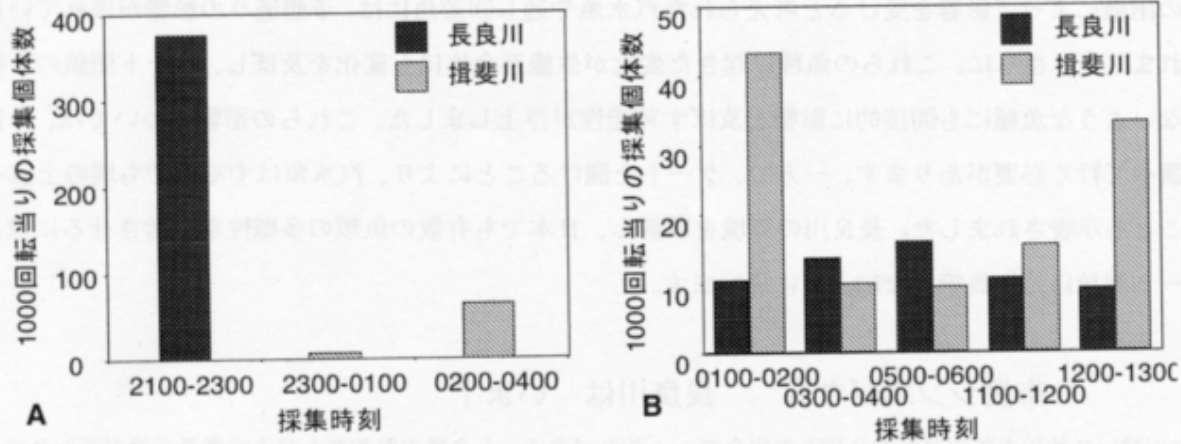


図3. 1999年11月24日から25日(A), および2005年11月17日から18日(B)に長良川と掛斐川にて行ったアユ仔魚の採集調査での採集個体数の比較. 両年とも掛斐川では採集個体数に大きな違いは見られないが、長良川では1999年よりも2005年の方が著しく個体数が少なくなっている。

5. 汽水域の魚はどうなったのか？

ゲート閉鎖により汽水域が消失したことで、堰上流の魚類相はどのように変わったのでしょうか？これを確かめるにはゲート閉鎖以前の魚類相との比較を行えばよいのですが、定量的な比較はいまとなっては不可能です。そこで、掛斐川の汽水域は現在でもゲート閉鎖以前の長良川の状態を保っていると考え、掛斐川と長良川を同じ時に同じ方法で調査することで、ゲート閉鎖以前と以後の長良川の変化を予想することを試みました。2006年4月から11月まで月に1回の割合で両河川の伊勢大橋上流付近において地引き網による定量採集を行いました。その結果、掛斐川では採集魚の98% (2935尾) を汽水魚が占めましたが (図4A)、長良川では汽水魚はわずか3.5% (52尾)にとどまり、95%は淡水魚でした (図4B)。ゲート閉鎖による魚類相の変化は顕著であり、長良川では堰から上流は汽水域の生態系が完全に失われたといいでしょう。

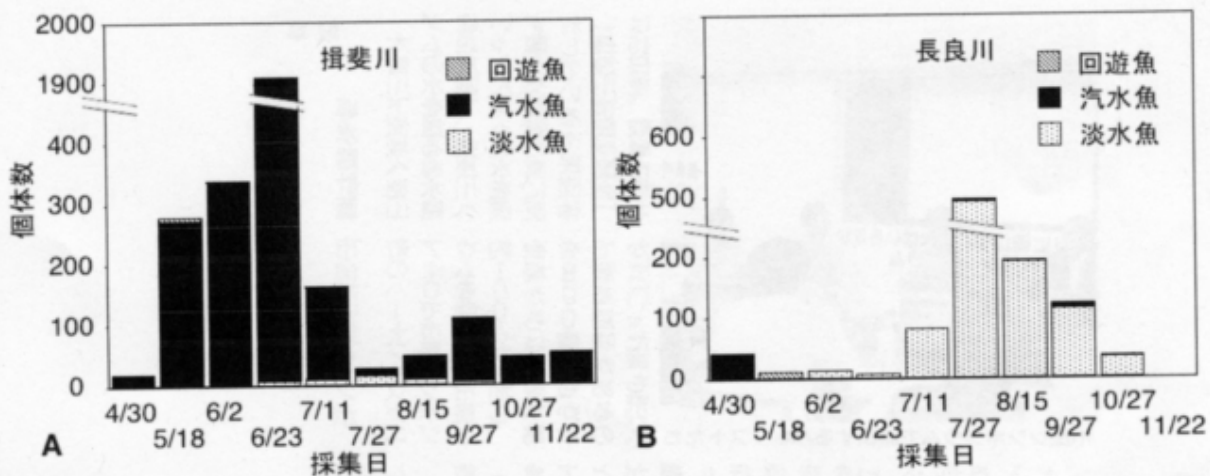


図4. 2006年4月から11月に掛斐川の河口から7.0 km地点(A) および長良川の河口から6.6 km地点の河口堰湛水域(B)にて行った、地引き網による定量的な魚類相調査の結果. 掛斐川では21種2941尾、長良川では16種1501尾が捕獲された. その内訳は掛斐川では98%が汽水魚であったのに対し、長良川では95%が淡水魚であった。

6. まとめ

ゲートの閉鎖によって影響を受けると考えられた汽水魚や通し回遊魚には、予想通りの影響が表れていることが示されました。さらに、これらの魚種に起きた変化が生態系全体にも変化を及ぼし、ゲート閉鎖の影響を直接受けたくない魚種にも間接的に影響を及ぼす可能性が浮上しました。これらの影響については、今後も継続的に調べて行く必要があります。一方で、ゲートを開けることにより、汽水魚はすぐにでも堰の上流へと進入することも示唆されました。長良川の環境を改善し、日本でも有数の魚類の多様性を復活させるには、河口堰のゲート開放以外に良策はないように思います。

市民シンポジウム 長良川は いま？

<講演に引続いて粕谷志郎市民学習会代表の司会で、4名のパネラーと会場の参加者も交えて意見交換が行われました>
庄司幸彦（長良川中央漁協理事） 今年のアユは数はいるが小さいのが多い。琵琶湖と一緒にの大きさである。

今年、中央漁協は12トンの稚魚を放流した。トン当たり400万円、総額5千万円になる。

向井貴彦（岐阜大学准教授：魚類生態学） アユは柔軟に生き方を変える。魚が多かったり、餌のコケが少ないと大きくなる。仔魚が孵化後、河口堰手前で死に絶えて、翌春他の川から長良川に上がったアユがまた海に戻れず死に絶えるのは残念。問題がある。

村上哲生（名古屋女子大学教授：陸水学） 河口堰のゲート閉鎖が長くなるほど弊害は大。開放すると堆積したヘドロが流出すると懸念が聞かれるが、増水時にも意外に流れていない。堆積物の量と質とを調査した上で早期の開放が望ましいと思う。導水路からは冷たい水が流れる。水温の問題は重要。河口堰による冬季の水温低下とその影響を思い出してほしい。

向井貴彦 長良川中流で30年間魚類採取をしてこられた後藤宮子さんの標本を見ると、長良川には非常に多くの種類の魚が生息していたことがわかる。それだけ豊富な餌や生息環境があった証拠である。河口堰や導水路によって河川環境を安定させるというのは、環境を単純化することであり、それによって多様な生物が失われることは、本当にもったいないことである。（文責：粕谷豊樹）



市民シンポジウムで議論するパネリストたち

【鈴木敬子】
改めて「着工は許さない」との立場を確認した。
古屋康則・岐阜大准教授が、長良川河口堰（三重県桑名市）ができて13年がたち、天然アユが激減していることなど、すでに長良川が被っている影響を指摘した。その後、パネルディスカッションが行われ、長良川中央漁協（美濃市）の庄司幸彦理事は「河口堰ができて、一時はアユの廻りが7万匹まで落ち込んだが、今年は22万匹まで盛り返したところだ。ダムは汚い水は入れてほしくない」と訴えた。

岐阜
導水路計画 市民団体シンポジウムは許さない
木曾川下流域へ徳山町のハートフルスクエ
ダムの水を送る導水路
建設計画で、長良川へ
いったんダムの水を流
す国土交通省の案に反
対している市民団体
「長良川市民学習会」
は15日夜、岐阜市橋本
かこといった声も飛び、
会場からは「導水路
を890億円もかけ
て造る意味があるの
か」といった声も飛び、

毎日新聞（岐阜版）
2008年10月16日

不透明すぎる！「上流分割案」合意

08.11.28 近藤ゆり子

徳山ダムの水を長良川に流し、下流施設で木曾川河口部にもっていく…この上流分割案というのは誰がどうみても不思議・不自然である。下流施設は長良川河口堰取水施設の一部とする企みがあるに違いない、と思わざるをえない。そして名古屋市や愛知県は「長年、木曾川大堰近くでの長良川河口堰の取水を要望してきた、下流施設はその第一歩」と堂々と言う。しかし国(中部地整)や岐阜県は「河口堰の取水は別問題」と言い、上流分割案合意に至った経緯を明らかにしようとしなない。さまざまな文書名での情報公開請求に対し「理由＝不存在」で非公開としてきた。

8月6日の岐阜県の「非公開(理由＝不存在)」決定に異議申立をし、岐阜県情報公開条例に基づく審査会の手続が動き出した10月17日、国(中部地整)は「徳山ダムに係る導水路検討会幹事会等資料」という膨大な資料を開示決定した。いわば岐阜県はハシゴを外されたのだ。

この資料によると07年3月16日の第5回幹事会では「木曾川水系連絡導水路 最終案(上流分割案)」として下流施設を長良川河口堰取水の兼用施設と位置づけている。その後「最終案」は曖昧となり、現在の上流分割案では隠された形になっている。利害が錯綜する大問題はすべて先送りして、「先ず木曾川水系連絡導水路建設ありき」を合意したということなのだ。

11月21日に、長良川市民学習会として、岐阜県河川課に緊急申入書を送り、25日に岐阜県河川課長名で以下の文書回答を得たので、異議申立を取り下げた。

これまで貴「長良川市民学習会」の交渉において、「木曾川水系連絡導水路－上流分割案－」となったことに関する経緯についての説明が、必ずしも十分でなく、結果として誤解を与えた面もあったことを理解しました。

今後も引き続き貴「長良川市民学習会」の交渉に応じ、木曾川水系連絡導水路に関するこれまでの経緯及び今後の岐阜県の考え方について、誠意をもって説明を行って参ります。

また、岐阜県情報公開条例の本旨に則り、情報開示に努めて参ります。

まだまだ上流分割案合意に隠された問題は解明しきれていない。今はっきりしているのは、岐阜県だけの問題にとどまらない、ということである。

市民を無視して「密室で決める」公共事業のありようを変えていくことこそが、真に川－自然－を守り、暮らしを守ることに繋がると考える。

【鈴木敏子】

求めた緊急申し入れ書を提出していた。

ム画 ダム計画 山路 徳導	壱利水と兼用案も
中部地方整備局と東海3県、名古屋市で作る「徳山ダムに係る導水路検討会」の担当者レベルの会議で、徳山ダムの水を木曾川へ送る導水路の下流ルート、長良川河口堰(三重県桑名市)の水を木曾川へ送る施設と兼用する案を一時、検討していたことが、「徳山ダム建設中止を求める会」が中部地整から開示された資料で分かった。	既に廃案となったが、中部地整河川環境課は「河口堰の水利用は課題となっており、将来的には兼用があるかもしれない」としている。同会は「度が過ぎた濁水対策だ。合理性のない水資源開発が、密室で検討されていた」と批判している。
「資料不存在」は遺憾	開示された担当者会議の資料によると、下流分割案で合意した。【鈴木敏子】
県が市民団体に文書	奥河川課は26日までに、市民団体「長良川委員会(船谷志郎代表)」に、徳山ダムの水は要ら
毎日新聞 岐阜版 08・11・27	流ルートと河口堰の利水導水施設を兼用し、河口堰事業分として約60億円の建設費拠出を検討していた。兼用施設を造った場合は毎秒10・72立方メートルの水を流すことが可能になり、濁水被害軽減などのメリットがあるとしている。
れた同会との3回の交渉で、徳山ダムの導水路計画が上流下流分割案になった経緯の説明について「十分でなく、結果として誤解を与えた面もあった」と文書で遺憾の意を伝えた。会のメンバーが「徳山ダムに係る導水路検討会」について、国と3県1市から出されたすべての資料の開示を求めたところ、県は「不存在」を理由に非公開を決めた。しかし、中部地整が検討会の担当者レベルの会議資料を開示。市民団体が21日、「経緯の説明が十分であり、対応に問題があったことを認めること」など3点を求めた緊急申し入れ書を提出していた。	

(詳細は、「徳山ダム建設中止を求める会」事務局長ブログ<http://tokuyamad.exblog.jp/>に掲載しました。)



校歌に歌われた長良川 ④

岐阜市立岐阜商業高等学校校歌

作詞／各務虎雄

作曲／内木 実

金華のみねは名将の

いさおを世々に語りつく

自律の気概火ともえて

あしたを興す創造の

力をともに培わん

われらの学び舎 とわに燦たり

長良の川は水清く

昼夜をおかず流れつく

進みてやまぬ意気高く

あしたの栄え切り開く

力をともに養わん

われらの学び舎 とわに燦たり

暑かった今年の夏の甲子園にこの歌が流れました。1969年(昭和44年)に市制施行80周年を記念して創立された市岐商は、40年を目前に再度廃止が取沙汰されています。選手たちの心中を想い、胸を熱くして応援した人も多いことでしょう。

事務局より

「球磨川は守るべき地域の宝である」と熊本県の蒲島知事は川辺川ダム計画へ、県として建設反対を表明しました。42年間もの、川を守りたいという流域の住民の思いと、粘り強い運動がついに行政を動かしました。私たちの長良川もかつては日本でも有数の魚種数の多い豊かな川でした。古屋先生の講演によれば、河口堰が運用され13年たった今では、海から遡上する魚はほとんどなくなり、長良川の代名詞ともいえる天然鮎は、統計上消滅したのではとのことです。長良川の鮎の全漁獲高は放流漁獲高を下回っています。この上、徳山ダムの水を長良川に放流したらどうなる

のでしょうか。昨年夏、突然発表された計画立案の経緯は不透明で、長良川の自然環境改善という目的も納得できるものではありません。長良川河口堰問題を教訓にして改正されたとされる1997年の新河川法は、市民参加と自然保護をうたっています。2010年は長良川で「第30回全国豊かな海づくり大会」が、名古屋市では「生物多様性条約締約国会議COP10」が開催されるとのこと。長良川再生こそがこれらの会議の大きな目標になるのではないのでしょうか。

2009年もどうぞよろしくお願いいたします。

発行：長良川市民学習会（「長良川に徳山ダムの水はいらない」市民学習会実行委員会）

代表：粕谷志郎／岐阜大学教授

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298 〒500-8211 岐阜市日野東7-11-1

HP:<http://dousui.org/>（新しくなりました。ぜひご覧ください。）

●私たちの運動はみなさんのカンパで成り立っています。賛同してくださる方はぜひカンパをお願いします。

郵便局口座番号：00880-7-88259 口座名称：粕谷志郎(カスヤ シロウ)